

日本人の美しい心 美しい生き方



平成十八年四月二十日、こんな記事が各紙一斉
に載りました。

——奈良県斑鳩町の法隆寺で、東大門（国宝）の
ヒノキの柱に『みんな大スキ』と彫られた落書き
が見つかった——

日本人の道徳心・公共心の低さここに極まるとい
う思いと同時に、寂しさと悲しみを感じます。古来
日本人が営々と培ってきた「畏敬の念」「伝統や文化
を守る」「ものを大切にし、感謝する」といった美しい心
や生き方を、現代の日本人は忘れてしまっ
たのでしょうか。

酒井裕子さんと吉川先生



ある日曜日の朝。海から程近いA駅に、
酒井裕子さん（42歳）が降り立ちました。

「海が近いせいか、風が涼しくてとって
も気持ちがいい。いつ来ても思うけど、

吉川先生はいい所にお住まいだわ……」

ここから二時間ほど離れた街に住んで
いる裕子さんは、幼いころから吉川邦子
先生（60歳）にピアノを習ってきました。



以来、吉川先生を「人生の師」として心から尊敬しています。今でも二か月に一回は自宅を訪ね、レッスンを受けています。今日はそのレッスン日でした。



また、裕子さんはこの街が大好きでした。表通りにはお洒落なブティックやカフェが建ち並び、歩いているだけで心が弾みます。一方、横道を一步入ると、古い街並みが残り、神社やお寺が静かな佇まいを見せています。この新しさと古さとの絶妙な調和が、この街に独特の魅力を与えています。裕子さんには、それがとても心地よく感じるのです。

*

*

「そろそろ先生のお宅だわ」

裕子さんが視線を先に送ると、自宅の前で先生が手を振っていました。

「あら、先生じゃないですか」

「よかった、裕子ちゃんのレッスンに遅れるかと思って、あわてちゃった……」

額の汗をタオルでぬぐいながら、吉川

先生は明るい声で答えました。

「お、おはようございます。いったいどうしたんですか、その汗」

「今ね、清掃奉仕せいそうほうしから帰ってきたところなの。遅くなると思って走ったから汗

「いったい全体、
このごろの日本人は……」



一時間あまりのレッスンは終わると、楽しいおしゃべりの時間が始まります。裕子さんにとっては心こころ和なごむひと時ときです。

「さつきはごめんなさい。汗びつしよりで……」

「ちよつとびつくりしました。それにしても、先生、どうしたんですか」

「裕子ちゃん、私が〃街を愛する会〃に

びつしより。詳しいことは後で話すとして、すぐにレッスンを始めましょうね」

……しばらくするとレッスンは始まりました。裕子さんが弾ひくピアノの音色ねいろが住宅街の一角に静かに響ひびぎます。

入っているのを知っているわよね」

先生はニッコリとほほ笑えみながら、さらに言葉を続つげます。

「実は、すぐ近くに、この辺あたりでは由緒ゆいしよある神社があつてね、先月から会のメンバーで月二回、日曜日の朝に掃除奉仕そうじをしているのよ。今朝もワイワイと楽しくお掃除をしていたら、裕子ちゃんのレッ

スンに遅れそうになっちゃって……」

「それで急いで帰って来られたんですか。私のために申しわけありません。それにしても、奉仕活動なんて立派ですね」

「そんなことないわよ。メンバーがいい人たちばかりだから、私も楽しみながらできるのよ。」

裕子ちゃんもこの街が大好きって言うていたけど、一步路地に入ると、立派な神社やお寺があつたりするでしょう。私たちがこの街が大好きなの。でも、最近は無心な観光客もいてね……。この前なんか、神社の柱に落書きがあつたのよ。それも相合傘の大きな落書き。信じられる？」

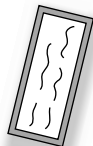
「神社に落書きですか……まさか」

「神様をも恐れぬ所業でしょう。落書き



を見つけたときは、もう情けなくって悲しくなっちゃった。いったい全体、このごろの日本人はどうなっちゃったのかしら」

畏敬の念を忘れた日本人



「身近でそうした現実を知ると、本当に悲しくなりますね」

裕子さんはつぶやきました。

「先生は昔から、日本人の美しい心を大切にしないで、ピアノの音楽表現の幅が

広がるわよ」って、おっしゃってましたものね」

「昔の日本人は、日本の美しい自然を愛し、俳句や歌にまで詠んで大切にしていたでしょう。素朴な営みの中で、常に大いなるものに生かされていると感じ、神や仏を畏れ敬い、自然と共生して生きてきた。私は、そこに「日本人の美しい心と美しい生き方」を感じるの。日本人が本来持っている精神性の高さとも言うのかしら……」

そうした細やかで豊かな感性や心を磨くことは、音楽に親しむうえでも、生きるうえでも大切なことなのよ。



ところが、今の日本人はどうかしら。
自然を愛する心や畏敬の念など皆無。日
本人が培^{つちか}ってきた伝統文化も興味なし。神

社の柱に落書きなんてその最^{さい}たるもので
しよう。だから、心がカラカラに乾^{かわ}いて、
殺^{さつぱつ}伐とした世の中になっっちゃうのよ」

人はもっと豊かな心で生きられる



「そういえば、先日、新聞に『日本を探
す』というテーマで、伊勢神宮を訪れた
記者の体験記が紹介されていました」

るものではなく、感じるものではないで
しょうか」

——正殿は白絹の幌^{とほり}の向こうに鎮座^{ちんざ}し、
その姿を直接見ることはかなわない。

虚^{きょ}を衝^つかれた。と同時に、《そんなこと
も分^わからず伊勢神宮にまでやってきたの
か》と、自分に対
して深^{ふか}いため息が
出^でた。

「なぜ正殿を見せないのですか」

何^{なに}気^きなく神宮司^{じんぐうし}序^{じよ}の木田雄^{きのたゆう}介^{けい}さんに尋^{たず}ねた。

西行^{さいぎやう}（二二八）

ねた。

「畏^{おそ}れ多いからです。また、神様は見

一一九〇年）が伊勢
神宮で詠^よんだと伝



皇大神宮(内宮)

わる歌がある。

《何ごとのおわしますかは知らねども
かたじけなきに涙こぼるる》

僧である西行は、……何か大きな存在を感じ、恐れ多くて涙がこぼれると詠っているのだ。(中略)合理主義と物質主義にどつぷりとつかり、そこから抜け出せない自分をつくづくと感じるのであった——(平成十八年五月十一日付『産経新聞』、「伊勢神宮(2) 恐れ多き心の御柱」)。

「……先生のお話と通じるものがありますよね。この記事を見て、亡なくなった父が、心で見なければ物事はよく見えな
い。肝心なことは目に見えないんだよ」
(『星の王子さま』、サン＝テグジュペリ)と
言っていたことを思い出しました」

「畏敬の念なんて前時代的で抹香臭いと
思われがちだけど、仏壇ぶつだんの前で手を静かに
合わせていると、不思議ふしぎと心が落ち着
いてくるものよ。大自然や神仏、ご先祖
さまのことを少し感じるだけで、人は
もつと豊かな心で生きられるのに……。
最近の日本人は、そんな心をどこかに置き
忘れてきたような感じがしてならないの。
あら、ごめんさい。清掃奉仕の話が
いつの間にか、日本人論にまで発展し
ちゃった。でも、たまにはこんな話もい
いかしら。ね、裕子ちゃん」
クスツとほほ笑む吉川先生。裕子さん
は、「大自然や神仏、ご先祖さまのこと
を感じると、もつと豊かな心で生きるこ
とができる」という吉川先生の言葉が、
とても心に響いたのでした。

日本人の美しい心を 今に伝える伊勢神宮の神事

吉川先生が語った「日本人の美しい心と美しい生き方」や「自然や神仏に対す

る畏敬の念」は、古くから伝わる日本のよき伝統と文化の中に、今もしっかりと息づいています。

その国の伝統と文化は、長い民族の歴史の中で受け継がれてきたもので、不思議とその民族を象徴します。日本人の祖先が、どのような自然観や生死観を持っていたか、どのような想像力を持ち、何を尊び、何を畏れ敬ったかが分かります。

日本の伝統と文化——中でも、前述の伊勢神宮は、二千年の歴史を持ち、私たち日本人の心と魂の拠り所として、その悠久の時を刻んできました。そして、神宮で執り行われる数々の伝統的な神事は、



日本人の美しい心と美しい生き方を現代に生きる私たちに伝えていきます。

とりわけ世界に例を見ない神事が「式年遷宮」です。式年とは「定まつた年」という意味で、神宮の神殿の隣接地に同じ広さの宮地がもう一つ用意されており、伊勢神宮では二十年に一度、社殿を同じ姿で隣に新しく造り替えるのです。

第一回の式年遷宮は持統天皇四年（六九〇年）に行われ、以来千三百年、戦国時代の百年を超える中断はあつたものの、今日まで脈々と続けられてきた大祭です。数えて六十二回目となる式年遷宮は、平成二十五年に執り行われる予定です。その式年遷宮の中でも、もつとも勇壯で賑やかな祭が、今年五月に行われた「お木曳」です。

「やつとこせー、よいやなー」

伊勢の町々に勇壯な木造り唄が響き渡ります。二十年に一度の遷宮。新しいお社造宮のために切り出した御用材を、伊勢の町々が自慢の「お木曳車」に乗せて神宮神域に曳き入れるお木曳は、伊勢神宮の悠久の歴史を「神領民」（神宮の領地に住む人々）として見守り続けてきた伊勢人の晴れ舞台なのです（※）。

町内ごとに揃いの法被を着て、音頭に合わせて、「エンヤ！ エンヤ！」の掛け声も威勢よく、老いも若きも入り交じり、お木曳車から伸びた二本の長い綱を曳きます。時に、綱は荒ぶるように大通りを右へ左へと蛇行を繰り返し、祭に力強さと勇壯さを加えます。

(※)内宮のお木曳は、五十鈴川をさかのぼる「川曳」。外宮は旧参道などをお木曳車で運び入れる「陸曳」がある。



いつの時代も新しい 日本最古の建築様式

それにしても、なぜ二十年に一度なの
でしょうか。その理由はどこにも記され
てはいませんが、建築史が専門の早稲田
大学教授・中川武氏は、次のように推測
しています。

「諸説あるのですが、その一つが耐久性。
つまり、伊勢神宮の建物は掘立萱葺の素
木造りです。掘立柱は土の中に入ってい
るから、腐りやすい。また、二十年もす
ると萱葺屋根には苔も生えるし、草も伸
びる。日本の神は常に新しい生命を付与
していくわけだから、神殿の汚損は具合
が悪いのです。その限度が二十年だった
のでしょう。もう一つは、造営する側の

技術の伝承です」（小学館刊『サライ』平成十
四年二四号より抜粋）

神道には「常若」という考え方があり
ます。神のお住まいは常に若々しく、気
持ち良く新しくしておきたいという思い
が、そこには色濃く影響しているのです。

また、エジプトのピラミッド、ギリシ
アのパルテノン神殿などの石造物は、そ
れが壊れてしまえば建築技術を伝える術
がありません。しかし、伊勢神宮は先人
の知恵により、二十年ごとにみずみずし
く蘇り、いつの時代にも生き生きと存在
し、永続するのです。

太古の日本人は、この式年遷宮を通じ

て、神様に若返っていただいて、清らかな「光」と力強い神のエネルギーをいただき、よりすばらしい時代が迎えられるように祈りを込めたのではないでしょうか。その祈りが千三百年もの長きにわたる「心の連続性」となり、今に伝えられていると言えるでしょう。

ご正殿をはじめ社殿すべてを新築し、御神体を遷すのですから、その準備は大抵なものではなく、長い年月が必要です。これが六十回以上を数えるまで繰り返されてきたのです。日本という国がいつまでも若々しく、永遠に発展していくようにとの願いを込めて、神のお住まいを二十年ごとに建て替え、新しい息吹を吹き込んできた日本民族の知恵とその精神の素晴らしさがここにあります。



日本人としての生き方を見直す

岡田幹彦氏（日本政策研究セン

ター主任研究員）は、日本社会の閉塞状況の

原因を次のように指摘しています。

「昨今のさまざまな問題は、戦後日本人が伝統的価値観をあまりにも粗末にして

きたことから生じています。

今の止めどもない社会と人心の荒廃。

ひと言で言いますと、結局日本人が自国の歴史を忘れ、伝統を忘れ、文化を忘れ、そして郷土愛も忘れてしまった。そこから日本人としての誇りと自信が、すっかりなくなってしまうている。ここからありとあらゆる今日の人々の精神の荒廃状況、まがまがしい諸々の事件ができてくるのではないかと思います。

どこそこが悪いという表面的なことではなく、今、日本社会が陥っているこの閉塞状況がどこから出てきているのかということについて、問題の根本に立ち返



らなければならぬと思います。それが結局、自国の歴史、伝統、文化に基づいた日本人としての生き方の喪失そうしつなのです。それを今こそ見直し、考え直すということが何よりも大事ではないかと思えます」(モラロジー研究所刊『れいろう』、平成十八



年四月号)

人知を超えるおおいなるものに対する感謝と畏敬の心は、清らかで豊かな心をはぐくみます。そして、日本の歴史や伝統・文化の素晴らしきを見直すことは、日本人としての精神的な支柱を確固かこたるものにします。

昨今、日本人の道徳心の低下が叫ばれています。そうした精神的荒廃は、家庭や学校・地域社会の中で、「日本人の美しい心」を次世代に教え伝えてこなかったことにも、大きな原因があるのでではないでしょうか。

八月の夏休みシーズン、まずは身近な地域に伝わる伝統や文化に触れて、その奥に流れる「日本人の美しい心と生き方」を再発見してみてはいかがでしょうか。